

優しい言葉

媒酌の役を終えてぐੱつたりの妻。それでも花嫁さんの人柄をほめていた。「衣裳替えで私も席を立つ度に心を配り、お疲れでしょう、大丈夫ですかと案ずる。笑顔もごく自然で……」と。

私は媒酌人としてあいさつ―。「英子さんは今日から新郎と母二人だけの家庭に加わります。最高の宝ものを持参して。宝とはお釈迦様が宝とされた優しい言葉、柔らかな眼差まなざしです。お家はいつそう優しさに包まれることでしょう。英子さんは天性ですから起伏はあっても崩れることはない。新郎羽田野一彦君はこの美德に引かれました。英子さんが寮母として働く任運荘はきつい所と言われます。お年寄りに対しどうしても優しくできない寮母は退職してもらおうからでしょう。老人ホームで優しさのないのが一人いても、利用者には地獄にかわりないからです……」

このあいさつがそっくり老妻への優しさとなっていたのである。ふつう、花嫁は人生最高の緊張と幸福の絶頂に陶醉し、自分のことはいっぱいです。だのにこの二十一

歳は老妻の上にも思いをかけている。天性とは心の自然であり、自然は美しい。人の心を洗ってくれる。

良寛和尚の歌―「古い人は心よわきものぞ　み心を慰め給へ朝な夕なに」。任運莊のあちこちに掲げて寮母の心に訴えている。老いゆくにつれ本当に欲しくなるもの。それは優しい言葉、和やかな表情である。それがあれば何もいらぬ。それがなければ、何があつても地獄と変わらない。

(一九九四年四月二十九日)